神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

A Report on "The Ship for the World Youth" and Participants' International Exchange Activities

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 1990-10-31
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 北畠, 霞, Kitabatake, kasumi
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2217

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

「世界青年の船」に参加して

北畠　霞

今年1月17日から60日余り，総務庁主催の第2回「世界青年の船」に指導官として乗船し，インド洋から紅海，スエズ運河を経て，地中海を渡りギリシャまで，13か国の青年280人と航海する機会に恵まれた。このプロジェクトに使われた「にっぽん丸」は途中，ボンベイ（インド），アレクサンドリア（エジプト），ピレウス（ギリシャ），マスカット（オーマン）に寄港，船の中での国際交流だけでなく，現地での青年たちとも活発な交歓の会を持った。この船における小生の主な役割は，指導官として各種の講義を行うことであったが，3万5千キロメートルに及ぶこの旅行では，長期にわたる集中的な共同生活の下での多様な異文化体験を持つことができた。そのいくつかをここに報告したいと思う。これに参加するため，出向を認めて頂いた教授会にこの場を借りて，お礼を申し上げたい。

〔世界青年の船〕

「世界青年の船」というと，「ああ，川嶋紀子さんが乗られたあの船ですね」とよく言われる。あの船は，やはり総務庁が主催する同じ趣旨の国際交流の船だが，「東南アジア青年の船」と呼ばれ，毎年秋，東南アジアの青年と日本の青年が同じ「にっぽん丸」に乗って東南アジア各地を訪れるものである。「世界青年の船」の方は毎年1月から3月にかけ，一年おきに米州（北米・中南米）と南アジア・中東・地中海地域へ向かう。第1回目の昨年はホノルル（アメリカ），アカプルコ（メキシコ），グアヤキル（エクアドル），ラグァイラ（ベネズエラ）を訪問した。

実は「世界青年の船」は，1967年に発足した「青年の船」の後継プロジェクトである。「青年の船」は外国に行く機会が少ない日本の地方の青年を対象とした，いわば海外見聞の船だったが，これだけ多くの日本人が海外旅行を楽しむようになった現在，もはやその意義はなくなったということで，日本の青年と外国の青年が共同生活し，国際交流，異文化体験の実をあげることを目的に改組されて「世界青年の船」が生まれた。このプロジェクトの下で，船は4か国の港に寄り，その国を公式訪問して，「訪問国活動」（現地の青少年団体との交歓など）を行う。こうした公式訪問国から各21人（今年はインド，エジプト，ギリシャ，オーマンから計84人），その隣接・周辺の2か国からそれぞれ12人（今年はパキスタン，スリランカ，チュニジア，モロッコ，イタリア，西ドイツ，アラブ首長国連邦，およびクウェートの計8か国，96人），そして主催国日本から100人，総計280人が参加することになったわけだ。

日本の参加青年は各都道府県単位で選抜され，最終的には総務庁が選ぶことになっていて，全体の構成は男女半々，いろいろな特殊技能を持った人が加わること，などが選抜にあたって考慮される。だから20歳代の青年で，ある程度英語ができること，という以外に全国一律の基準はないようで，英語が素晴らしい帰国子女もいれば，それほど英語が得意でない人もいるし，学生もいれば会社勤めの人，会社を辞めてきたＯＬもいるし，ピアノの先生も加わっていれば，空手が得意な女性もいる，という多様な構成だ。要は積極的に国際交流ができるかどうか，ということになろう。本学の国際関係学科4年の浅野かおりさんも今年の船に加わり，外国人労働者問題に関する討論会を組織するなど，大いに活躍したことをここで報告しておきたい。

外国からの参加者の選抜は，現地政府の青少年省とかスポーツ省などが日本大使館と連絡を取り合って行われるので，国によってどのような人が選ばれるかはまちまちである。たとえば今年の船では，パキスタンからは当時与党だったパキスタン人民党系の人が目立ったし，スリランカの参加者の中に

は日本語がかなりできる人が目についた。13か国の代表団はそれぞれナショナル・リーダーによって統括されている。だからこのナショナル・リーダーたちは概ね他の団員より年長で指導力のある人物が多い。国単位で活動する場合，例えばナショナル・デーの行事の際には，この国別・縦割りの組織で運営される。しかし，グループとしては国別だけで存在するのではない。全員がAからMまでの13のグループのどれかに属し，このグループはどの参加国の人も必ず入るよう，いわば横断的な組織がつくり上げられている。色々な船内活動は主にこのグループ別に行われる。そしてナショナル・リーダーがAからMまでのどれかのグループの責任者を兼ねる仕組みになっている。

船の中での行事は①各種の講義②参加者の討議・討論③スポーツ・レクリエーション④その他の自主活動――に大別される。船の最大の眼目は国際交流であるから，これを縦糸とし，参加者の自主的運営を横糸として，ほとんどすべての行事が組織される。もっとも講義は参加者の自主活動によって行うというわけにはいかないから，この点では講義は例外といえるだろう。講義については後ほど改めて説明することにする。

多様な人たちが乗り込み，船という閉鎖社会の中で，多彩なプログラムをもつこのプロジェクトを運営するのは，総務庁青少年対策本部国際交流第2係を中心とする22人の管理部の人たちだ。管理部は一人の管理官，二人の副管理官の下に，総務，会計，活動，生活の4班に分かれている。こう言うと，かなり官僚的な感じを与えるが，日常的には参加者の国際交流活動を支援する「サポート部隊」といった感じで，寄港地の「訪問国活動」のため，参加者がバスで移動する時などは，メガホンを持って集まりの悪い団体旅行客を呼び集めるツアー・コンダクターさながらの動きをしなければならなくなる。こうした場合，日本の組織者は一般的にいうと，かなり面倒見がいいし，時間通り全員を間違いなく集めようとする。しかし国によってはそういった集団行動に全く慣れていないところもある。あまりの集まりの悪さに，横でみていた私も，本来その任でないにもかかわらず，遅れて出発したバスの中で

「こんなことは言いたくないけれど」と前置きして，思わず一席お説教をしてしまうということもあった。

今年，船は1月17日正午，出航した。外国の参加者は出航に先立ち10日ほど前に日本に着き，若干のオリエンテーションのあと，地方で2泊のホームステイをし，東京に戻って日本人参加者と合流し出航前研修をすませて，いよいよ出発，ということになる。後でも触れる機会があると思うが，このホームステイは日本人の生活を見てもらう上で非常に有意義であり，もっとステイできればよかった，と多くの外国人参加青年が口をそろえていた。

外国参加者は帰途，帰国に便利な所で下船することになっていて，ピレウスではヨーロッパ，地中海諸国の代表が，オマーンでは湾岸諸国の人たちが，そしてシンガポールでは南アジア組が下船するので，船内は次第にさびしくなり，シンガポール以降は日本人だけとなる。

〔船内の異文化体験〕

「世界青年の船」での生活は，かなり「浮世離れ」したものとなる。参加者は陸上での日常の生活を一時お預けにして，船の中でのプロジェクト中心の生活にいそしむ。学生は学校を中心とした生活をする必要は船の中ではない。社会人も日頃の仕事は全く気にしなくていい。朝7時の起床から夜11時の就寝時まで，国際交流だけに打ち込むことができる。しかも周りは，これまで全く知らなかった異国の人たちだ。寄港地にたち寄っている短い期間は別として，2か月以上も船から逃れることはできない閉鎖社会だから，参加者は船に乗った瞬間から，英語を中心とした（英語は「標準語」とされ，一種の公用語となる）異文化体験の世界に投げ込まれてしまう。

英語の生活は午前7時の起床から始まる。だいたい，違った生活をしてきた者，とりわけ若い人たちが一緒に生活すると，お互いに対する好奇心で，話が尽きず，ついつい夜おそくまで話し込んでしまうことになる。この船の参加者はまさにそうで，話が明け方にまでおよぶことがよくあったようであ

る。まして船にはいろいろなプログラムが用意されているため，その準備に彼らは懸命となる。朝が遅くなるのは避けがたいのだ。午前7時起床というのはいささか遅い気がするが，それでもたたき起こさないと，多くの人が起きてこない。そこで各グループが順番に担当して，船内放送を使いたたき起こし役を務める。ある組はやかましいロックをならし，"Go-o-o-od morning! It's time to wake up." とがなりたてて1日を始めるが，インドの港に近づけばヒンドゥー語，中東の港ならアラビア語でもアナウンスするグループもある。

このように今年の船には，人種，社会，歴史，文化など多様な背景を持つ人々が乗り込んだ。ただ多様というだけでなく，かなりの特殊性を持った文化を代表してきていると言える。誰でも考えるのは，食事をどうするのか，アルコールは？——ということだろう。牛肉に手をつけないヒンドゥー教徒，豚肉はタブーのイスラム教徒，それにベジタリアンも4人乗っていた。前年度の船では全員にセットメニューが出されたそうだが，今年はビュッフェ・スタイルで，例えば同じカレーでもラム，チキンのものもあれば，ビーフ，さらには野菜だけのものもあり，しかも内容を目につく形で表示する，という形で解決された。またアルコールをたしなまないイスラム教徒の目の前で，飲んでいい人たちが気炎をあげていいのか，という心配もあった。参加者たちはこの問題を話し合い，自動販売機のものも含め，アルコールの販売は夕食が終わる午後7時半から消灯（午後11時）までとすることに決めた。少なくとも筆者が知る限り，アルコールで騒ぎが起きたことはなかったようだ。

食事の問題はバラエティを持たせることで簡単に解決したが，管理部の担当者が出発前に頭を悩ませていたのがイスラム世界での女性の問題であった。このプロジェクトではどの参加国からも男女同数の参加者を迎えるのが一応の原則となっている。一般的にいえば湾岸諸国の，とくに君主国では保守的な政策が採られているから，そもそも女性が参加してくれるのだろうか，というわけである。実際，オマーンとアラブ首長国連邦は参加者全員が男

性だった。船内で「女性の地位」をテーマにしたディスカッションが行われた時，女性の地位が比較的高いヨーロッパの参加者たちは，いくぶん勝ち誇ったような表情で「女性が参加していないのは一体，何故か」とオマーンやアラブ首長国連邦の連中に問いただしたものである。アラブ首長国連邦で眼科技師をし，こういう議論の場には必ず顔を出し積極的に発言するサリム・ラシド・カルファンも「いや，男女の区別なく募集したのだが，PRの機会がすくなく，女性は一人も応募しなかったのだ。女性がわれわれの代表団にいないのは，結果的にそうなっただけのことだ」といささか歯切れが悪い。

サリムが言ったことが本当かどうか分からないが，アラブの人たちのために言うなら，クウェートの代表団11人を率いていたのは化学機械技師で化学会社に勤める女性のサマール・ハリッドだったし，チュニジアのナショナル・リーダーもパリの大学で心理学博士号をとりチュニスの会社に勤める女性，ラディア・ハルアニだった。「チュニジアではブルギバ前大統領のリベラルな政策で一夫一婦制が法律で定められている。もっともアラブではチュニジアだけのことだが」というハルアニの説明は，「アラブ世界」と単純にひとまとめにできないことを教えてくれるものだ。そしてアラブの女性参加者たちはどの人も極めて活発で，論客ぞろいのイタリア，ギリシャの女性たちに一歩もひけをとらなかったのが印象に残っている。

もっともオマーンの首都マスカットに寄港した時，女性はくるぶしまで隠れる服装でなければならないとか，オマーンでは訪問先によっては男女別にグループを組むということもあったが，のちのオマーンの印象記で述べるように，これは現国王カブース・ビン・サイドの政策によるのであって，現実には女性の意識は，控えめな服装からは想像できないほど進んでいる面もあるようであった。

異文化体験は，しかし，頭を悩ますようなことばかりではない。誕生日には英語だけでなく，アラビア語，時にはヒンドゥー語などで「誕生日おめでとう」と書かれたケーキが用意され，自分は今，多様な文化の中にいるのだ

と思わせてくれる，とある参加者は述懐していた。「星を見る会」で降り注ぐ大小無数の星を鑑賞した時もそうだった。説明にあたるクルーが「ミルキー・ウェーのそばにあるのが…」といくつかの星座について話した時，すかさずギリシャのある参加者が「ギャラクシーの GALA はギリシャ語でミルクという意味だ。だからミルキー・ウェーと訳されたのだろう」と説明を加えた。参加者たちはインド・ヨーロッパ語族の広がりをその場で実感したのである。

〔文化ギャップ〕

航海の期間が長くなり，異文化に接した当初の好奇心の時期が過ぎて，共同生活が長くなると，文化ギャップによる悩み，困難，衝突もみられるようになる。さきにも触れたように，参加者280人のうち日本人が100人を占めている。外国の参加者が乗船の少し前に日本に来たばかりで，国別のグループとして以外には充分に組織化されていないのに反し，日本人の方は前年の8月に初顔合わせし，いろいろなクラブ活動のどれに自分が入るかも分かっている。地域ごとの集まりが開かれたところもあった。だから船内で管理部が説明を加える際に便宜上，日本人とそれ以外の参加者を区別し，「ジャパニーズ」と「ノン・ジャパニーズ」という言い方で色分けしがちであった。これに対して主にヨーロッパの参加者から異議が出された。「参加者は同じ立場でこのプロジェクトに加わっているのに，二つのグループに分けるのは差別である」というのである。

こうした場合「日本人」と「外国人」という言い方で分けるよりは，「ジャパニーズ」と「ノン・ジャパニーズ」と言う方がいいと思っていた私は，この分け方を特におかしいとは考えなかったが，私自身は講義の際に，どうしてもこの区別をつけねばならない時には「ジャパニーズ・フレンズ」「アザー・フレンズ」ということにしていた。ギリシャの指導官は「それじゃ，ホストとゲストにしたらどうか」との案を出したが，これも主客の立場を明確

にしてしまい，「ジャパニーズ，ノン・ジャパニーズ」以上に差別化する恐れがある。

結局，この二つのグループに分けねばならない時には，その時に応じてその場に相応しい表現で行われたが，その後の動きからこれはただ「言葉による差別」だけの問題ではないことが明らかとなってきた。ヨーロッパの参加者の中から「あるクラブに入ろと思ったが，そのクラブに行ってみると日本人のメンバーがどんと構えていて，われわれが入りにくい状況だ。クラブ活動も本来は全メンバーがそろった時に同時にスタートするのが当然ではないか」という。なかなか筋の通った議論だが，参加国の多さ，参加者の数などからみて，この案を実行していると，船が東京を出てから参加者の自主活動が行われるまでに余りにも多くの日数を要するだろう。というわけで，この議論も航海が進むにつれて問題にする人はいなくなったものの，プロジェクトの成功という結果を考えそのために効率よく組織化しておこうとする日本人と，結果に至るプロセスを重視する考え方の違いが，この問題の背後にあったように思う。

それからもう一つ，外国とくにヨーロッパの参加者は，組織，団体，規律を重んじる日本人のことだから，この航海でも参加者は厳しい管理体制を押しつけられるのではないか，との先入観をもって参加していたと思われるふしがある。船内での生活では午後11時に就寝することになっている。その時刻を少し過ぎると，当番の参加者が何人かで最上階のデッキをまわり，まだ残っている人がいると注意することになる。このデッキの下は船長はじめ船の幹部クルーの船室だから，デッキで遅くまで騒ぐわけにはいかないのだ。「それなら，そのデッキから11時に人がいないようにすればいいのであって，必ずしも11時を就寝時刻とする必要はないはずだ」とヨーロッパの参加者は食い下がる。アラブ首長国連邦のサリムも「本当は，この船で軍隊式にやられると思っていた。実際はそうでないことが分かってホッとしているがね」と洩らしていた。一定のルールは団体生活には必要なのだから，文化的背景

の違う人たちにも納得がいくように具体的，論理的な説明をする必要があり，それも少しはくどいほどのものでなければならないことを教えてくれる出来事であった。

〔「ペレストロイカ」事件〕

船が紅海から，樹木一本もない山々のふもとの油井から石油の炎がたちのぼる幻想的な景色を目にしながら，スエズ運河に入るころ，一つの問題が持ち上がっていた。船には正式なクラブ活動として新聞クラブがあり，日本人はもちろん，オマーン，クウェート，イタリア，インドの連中が10日に1度の刊行を目指して英字紙「シー・テールズ (Sea Tales)」を発行していた。私も元新聞記者として私設顧問を買って出，実際の作成には全く参加しなかったものの，新聞作成には最後の校正の過程が大変重要だ，などということを指導していた。ところが，このいわばオフィシャル・ニュースペーパーに対抗するアングラ版として「ペレストロイカ」がドイツの一部参加者を中心にして作成され，それがある朝，配付されたのである。

「ペレストロイカ」という題そのものから，この編集に携わった人たちの気持ちを充分読み取ることができるが，内容もまことに刺激的であった。

「多くの参加青年が船内で退屈しきっている。このプロジェクトを時間の無駄だと考える者もいる」

「多くの人が講義やセミナーなどに出席しないのは，その知的水準の低さからだ(the low intellectual standard)」

などと書かれたところがある。12ページにわたるこのペーパーにはこの他にも「クウェートの代表団はナショナル・デーに自分たちの国を紹介するビデオを見せたが，そこに描かれていたハイテクを取り入れた近代的病院などは珍しくもないのだから，見せるのは止めてもらいたい」と，アラブの連中が怒りそうな内容もある。

当然のことながら，これは静かな船を大揺れさせるに充分だった。「時間

の無駄だ」といわれた管理部，その講義の「知的水準が低い」とされた指導官が怒ったのはもちろん，アラブの参加者もクウェートのビデオ内容批判は，発展途上国の事情に対する無知をさらけ出したものか，事情を知って批判したのなら思い上がりも甚だしいと反発して「反ペレストロイカ」新聞を作ろうという動きさえ見られた。

「ペレストロイカ」グループは船内の騒然たる動きを知って，初め「説明会」を開くことにしていたが，余りにも反響が大きかったので，その会の名を「お詫びの会」に切替えなければならなかった。そしてこの「お詫びの会」には参加青年だけでなく，管理部，指導官も来てほしいという。

しかし「お詫び」するのに出てこいというのは何ごとか，ということで指導官の部屋にきてもらい，記事を書いた青年たちから事情を聞き，彼らと話し合った。この件は「船内新聞に関連した問題」だからということで，協議を進める役が私にまわってきたため，経緯を詳しく書けばきりがないが，要するに彼らの言い分は次のようなものだった。

「ドイツでは例えばあるプロジェクトに参加していて，95％までその内容に同意していても，同意できない残りの5％について，こうした形で不満を表明するのが普通だ。ドイツでいつもやっていることを，ここでもやっただけであって，人を誹謗するためのものではない。あくまでこのプロジェクトを良くするためだと考えてしたことだ」

管理部に対する不満，あるいは他の代表団の活動にたいする注文は，指導官としては関係ないことだから，もっぱら講義，セミナーなどについてわれわれは話した。彼らに伝えたわれわれの考えは概ねつぎのように要約できる。

「だいたいドイツの人たちは講義に余り出席していないではないか。（この記事を書いた青年は筆者の講義には全く顔を見せていない）。出席もしないのに『知的水準が低い』と判断するのは，どういう根拠からか。『多くの人』が言っているという形で書かれているが，ジャーナリズムの世界ではこれは名誉毀損で訴えられても仕方ない書き方だ。プロジェクトを良くするた

めの行為だとしても，自分の名において書くならともかく，『多くの人』の言い分として非難するのは卑怯である」

結局，彼らは数日後，ピレウスで下船する直前に「詫び状」を指導官室に持ってきた。自分たちは周りの人たちのことを気遣わずに問題となるような記事をいくつか書いたが，要するにわれわれはまだ子どもであることをこの事件から知った――と書かれていた。文化ギャップに出会ったときには，どう対処すべきかを彼らが身をもって知ったことは，国際交流を目的としたこの船の意義にかなうものだったといえる。そしてわれわれ自身も，この問題の経過をふりかえってみて，貴重な体験をもつことができたと思う。この事件の後，あるドイツの参加青年とじっくり話をする機会があった。その話の中で分かったのは，総じてドイツの参加青年，および他のヨーロッパの代表たちは，日本流の規則，与えられたメニュー方式に一貫して反対し，できるかぎり自主的な運営ができるよう望み，自分たちの思う通りに実行できない不満をこの様な形でぶつけてきたようだった。とりわけドイツの青年たちには，自主的討論会「ベルリンの壁」を催し，それが大成功に終わったという自信があった。議論や意見のやりとりが少ない講義には自分たちを啓発するものが少なく，「知的水準が低い」というのは，そのことを指すのだ，とこの青年はいう。今後，こうした企画をたてる際には，参加者の自主性を重んじた運営を真に考えないと，せっかく資金，人手をかけても，報われないことにあるだろう。結果よりプロセスを，というのが筆者の得た教訓である。

〔ベルリンの壁〕

船内では公式のプログラムとして3回の「ディスカッション」の時間が組まれ，「異文化交流」や「環境問題」「青少年問題」が議論された。たとえば環境問題では，先進国の参加青年が開発途上国の青年たちに，経済開発には環境悪化がつきまわると説けば，開発途上国側は，これまでの経済開発で先

進国が二酸化炭素などさんざん地球の周りに放出しておきながら，途上国に経済開発を抑えよというのは虫がよすぎると反発し，専門家のセミナーでもみられるのと全く同じ議論がくりひろげられていた。もちろん，それはそれで面白いものだったが，公式のディスカッションとは別に，参加者の自発的なグループが自分たちでテーマを選び，それを話し合うという会も何度か行われた。その一つがドイツの青年による「ベルリンの壁」だった。

ドイツの代表団には，ベルリン出身者が二人いた。二人は昨年11月のベルリンの壁崩壊前後のＴＶニュース番組から編集した１時間もののビデオを用意していた。ビデオは第２次大戦前のベルリンの情景から，1961年のベルリンの壁構築の状況も加えられた見応えのあるもので，これだけでも冷戦の終わりを再確認できる素晴らしいものだった。

その素晴らしさは，ビデオ鑑賞の後の議論でさらに大きくなった。ドイツの参加青年たちは，ほとんど全てがドイツの統一に反対だった。それは中部ヨーロッパに強大な統一ドイツができあがれば，周囲を刺激せずにはおかないし，ヨーロッパ全体にとって大きな不安定要素になるというのである。彼らは周辺の国々に旅行する度に「ナチス」とか「ヒトラー」などとなじられ，不快な思いをしている。統一すれば，そうした不愉快な反応がさらに増幅されるだろうと彼らは恐れるわけだ。そしてある参加者は「東西ドイツはもう別の国なのだ。私はフランスやイギリスのことなら，東ドイツのことよりよく知っている」と説明する。

すると，エジプトの女性が全く変な人たちだ，という表情で「貴方たちはベルリンの事態にあまり感動していないようだが，それは何故か」と問いただす。ベルリンの壁の崩壊によって，最後には東西ドイツは統一されるだろう。統一は分断されていた民族をまとめるものだ。民族主義を満足させるこれ以上好ましい事態はないはずなのに，どうしてドイツの参加者たちは素直にそれを喜ばないのか――という疑問からの質問だった。ドイツからの参加者の気持ちにもかかわらず東西ドイツは10月３日に統一の日を迎えたが，こ

うした議論のやりとりの中にも，民族主義の発露が国家統一を保つ上で必要な国々と，そうでない国々の人たちが持つ考え方の違いが見事にでていたと思う。

こうした形での議論が多くのテーマについてできるようなら，講義は確かにそれほど重要ではなくなるかもしれない。しかし「ベルリンの壁」は事態が劇的だっただけでなく，タイミングも良かったので，これだけの成果をあげることができたのであって，全ての問題で同じ成果をあげるのは，不可能でないにせよかなり難しいことも確かである。

〔講義，セミナー〕

ところで指導官が担当する講義とはどのようなものか。大学と同じように，船でも午前中に2限，午後にも2限（1限は80分）の講義の枠が置かれている。各指導官は，通常の講義，セミナー，特別講義の3種類の授業を受け持つことになっている。通常の講義は4回各1限ずつを1シリーズとして，これが3回，各シリーズを同じテーマについて話してもいいし，別々のテーマにしてもいい。ともかく12回の講義の時間があるわけだ。筆者は「転換点に立つ日本」と題して，第2次大戦のあと日本は大変な経済成長を遂げたが，それは占領軍の政策，冷戦，朝鮮戦争，ベトナム戦争など主に，外から与えられた枠組みがあったから可能となったのであって，これだけ経済成長した国が今まで通り外部に反応していくという形だけでは生きていけず，これからは自らの航路を描いていかねばならない時になっている，という趣旨の話を，ビデオも利用しながら講義した。（その英文のレジュメを参考までの文末に掲げておいた。）

セミナーは2限を1回として，合計5回。ここでは寄港地で手にはいるようにアレンジしていたニューズウィークを材料にして，ニュース雑誌の記事の構成，特徴，新聞記事との違いなどを説明，「日本の女性の役割」などという手頃な特集記事があると，それを基にしてディスカッションしたり，日

本人参加者を対象に翻訳講座にしたりした。これらは概ねいつも大学でやっているようなことだから，それほどの負担にはならなかったように思う。

特別講義は，担当の指導官がこれまでの経歴の中で，若い人たちに話しておきたい個人的体験を取り上げることになっている。もう23年も前のことになるが，毎日新聞のサイゴン特派員をしていたころ，数時間だけ南ベトナム解放戦線の捕虜になったことがあるので，それを材料にしてベトナム戦争観を話した。やはり，こういう話の方が人の集まりがいいようである。

講義を担当するのは，団長，主任指導官，および８人の指導官だ。今年団長は前半が国連大学副学長だった武者小路公秀明治学院大学教授，後半が板垣雄三東大教授で，それぞれ国際政治，イスラム史の専門家として参加者に強い印象を与えられた。主任指導官には例年，青少年指導やグループ活動を専門とする人が就く。８人の指導官のうち自然科学系の担当者が３人，精神医学が１人，日本語が１人，他は政治，経済を受け持つ。そしてこのうち２人ないし３人は船が訪問する国の先生が選ばれる。今年はエジプトのバハー・ザグルル(金属工学)，インドのジャヤンタ・ライ(政治学)，ギリシャのクリッソウラ・ディミトリアドゥ（経済政策）の諸氏が参加，指導官の間でもなかなか興味ある国際交流，異文化体験が繰り広げられたのはいうまでもない。

各指導官もいろいろ工夫して講義をされていたが，この企画の問題点は，講義，セミナーがプログラムの重要な部分を占めているとはいえ，出席すれば単位が取れるというわけでもなく，テストもあるわけでないから，どうしても受講者が少なくなるということだ。船の主要な目的は国際交流である。そのための面白そうなプログラム，たとえばナショナル・デーとか，エグジビション・デーなどが組まれている。そのため参加者は徹夜してでもその準備に取り組む。そうなると自然と朝起きるのが遅くなり，午前中に組まれている講義の時間に間に合う出席者はその分，少なくなるからだ。今後，一考を要する問題であろう。

〔オマーン〕

船はインド，エジプト，ギリシャ，オマーンを訪問した。訪問国のどこでも，ふつうの旅行では味わえない体験，交流があったが，オマーンを除けば旅行先としては，そう珍しいところではないだろう。ここではオマーンについてはすこし触れておこうと思う。アラビア半島の東南端にあるこの国は古くから海上交通の要衝として知られる。「シンドバッドの冒険」の船乗りシンドバッドはオマーンの人である。外国の支配におかれたことが全くないことをオマーンの人たちは誇りにしているが，19世紀末からは実質的にはイギリスの保護を受け，国の歳入の8割を石油収入で占めるほどの資源国でありながら，長らく開発が遅れていた。開発が本格化したのは20年前に国王の地位についたスルタン・カブース・ビン・サイドがそれまでの鎖国主義から開国政策に転じてからのことである。

海辺の首都マスカットに迫る山々の峰は鋭く尖り，山肌は砂色のところがあるかと思えば，鉄分が多いのだろうか黒い土で覆われた山肌も目につく。木や草はまるで生えていない。その不思議なたたずまいの山の間を，見事に整備された近代的なハイウェーが走っている。このハイウェーがつなぐ町々の建物は目が痛くなるほど白く，町並みはあくまで整然としている。砂漠の国だが，通りのいたるところに植えられた草花は，行き届いた手入れに満足しているふうである。オマーンの人たちは「こうした近代的な街作りは，現国王になってからのことだ」と胸を張るが，街全体が新しいから，ひどく人工的な感じがするし，バザールにでも行かなければ，人の群れを見ることもない。東京，大阪の雑踏になれた者にすると，人が住んでいるという匂いのないところなのだ。

通りでみかける交通巡査は，よくみるインド系の人々が多い。バザールの商店の経営者もまたインド系で，客ともヒンドゥー語やベンガル語で話していることが多い。日本の4分3の面積をもちながら人口は140万ほどだし，石

油，天然ガスを産出する以外は，これという産業もないのだから，モノもヒトも外国に頼らざるを得ない。しかし石油収入のおかげで，税金はなく，教育費，医療費のかからない生活を国民は享受している。これは船に乗っていたクウェート，アラブ首長国連邦の人たちから聞くかぎり，他の湾岸諸国にも共通しているようである。クウェートがイラクに侵攻されてから，他の湾岸諸国に衝撃が走ったのは，人々が基盤の弱いこのような状況にあることを知っているからだろう。

カブース国王は近代化政策を積極的に進めるとともに，伝統的価値観の重視によって，国の基盤を確立させようとしているようである。船に女性が加わっていないこと，他の参加女性がオマーンを訪れたときにはくるぶしまで隠れるような服装を求めたことなどは，その政策の一端を物語るものといえる。オマーンに船が着く前，オマーンの青年たちと雑談していた時，たまたま外国人との結婚に話が及び，私が「君たちは外国人と結婚するか」と聞いたことがある。「いや，外国人との結婚を禁じた法律があるから，その是非を論じるのは政治的な話題に触れることになるので，その話はできない」というのがその答えだった。実際に町で若い女性を目にすることはほとんどなかった。

しかし地方の都市にバス旅行したとき，小学校の英語の先生になるため（オマーンでは小学校から英語を教えている），英語の勉強をしている若い女性と話す機会があった。彼女は「先生になって給料をもらうようになったら，ポルシェかアウディを買いたい」「結婚後も仕事を是非続けたいので，結婚後の仕事を認めないような男とは結婚しない」と，びっくりするほどの率直さで話してくれた。彼女がかりに伝統的な生活からいくらかはみでた人物であるとしても，若い女性が手に入れられる情報というのは，欧米や日本の女性とあまり変らないことが，これからうかがえるだろう。静かで，保守的，伝統的で，いくらか人工的に作られたという感じがするこの新しい国でも，やはり人が生きていて，何かが動いていることをうかがい知ることがで

きて，ホッとする思いであった。

〔これからの「船」のために〕

かつて，筆者が若いころ「日本人は外国でいつも群れ歩いている」という批判を耳にしたし，そのように自己批判をすることが多かった。船では，少なくとも日本人の参加青年たちには「群れる」ということを全く感じさせるところはなかった。リーダーシップをとって積極的に外国青年を引っ張っていく人も目についた。外国を知り，外国に関心がある，外向性に富んだ集団だからということもあろうが，私は国際性という点から大いに意を強くした。

しかし，それにもかかわらず，国際交流をテーマにしたディスカッションの場の総括で「日本人は議論の際に心を開いてくれなかった」という不満が何人かの外国青年から出されていた。日本人同士で，あいつは心を開かない，という場合，グループに溶け込まない付き合いの悪い人物だというニュアンスで使われることが多いと思う。

船で外国の青年たちが「心を開かない」と言っていたのは，こうしたニュアンスではなく，ディスカッションをしているのに自分たちの意見を言ってくれなかった，という意味のようである。実際，議論を聞いていると，ほとんどが弁のたつ外国青年の発言となる。これは大体，日本人が参加するどの国際会議にも共通することだろう。

これには大別して多分，三つの理由があると思う。一つは英語にそれほど堪能でないこと，二つめは話している内容をよく知らないこと，そして第三はしゃべらないことを美徳とし，そのように教育されたことである。最初の二つは訓練すれば克服できるものである。しかし三つめの問題の克服はそれほど容易ではない。同質性の高い日本の社会では，モノを言わなくともコミュニケートしていけるという事情もある。今後，日本が世界で生きていくためには個人のレベルでも，国家のレベルでもきちんとモノをいうことが，国際化を進めていく上で欠かせないことなのだ。

外国の参加青年を対象に筆者は，このプロジェクトに参加する前と後とで，日本，あるいは日本人にたいする考えが変わったかどうか，変わったとすればどういうところか，というアンケートを船内で試みた。多くの人が参加前には「効率，ハイテク，組織，規律」といった言葉で日本をとらえていたが，参加後には，とりわけホームステイ（たった2泊とはいえ）の後には，親切でやさしい日本人という像を抱くようになっている。あるチュニジアの男性はこのアンケートの中で「私にとって日本とは，東芝，日産，ソニーなどだった。日本に来るまでは，日本はロボット，電子，ハイテクが占める社会と思っていた。しかし今は思いやり，良心，ものわかりの良さ，そしてダイナミズムのある国だと思っている」と書いている。

「顔の見えない日本人」とよく言われる。このチュニジアの青年も，来日前はまさしく日本人に顔を見出していなかったが，このプロジェクト参加で日本人に「人」と「顔」を見出したことになる。日本の代表団には多様な背景，職業の人が参加していたが，実際に企業戦士といわれる商社やメーカーの若いサラリーマンの姿はまことに少なかった。企業から2か月以上も休みをとったり海外研修という形で船にのるのは確かに難しいことだ。しかし外国の人たちは現に日本経済を形作っている担い手たちから直接話を聞きたがっている。その生活や悩みが外国につたわれば，日本人の「顔」がもっと見えてくるはずだ。そして日本人がいろいろな所で外国の人たちにもっと発言するようになれば，ロボットのような人ばかりの不気味な日本というイメージは少しずつ薄れていくだろう。

ギリシャから参加していた指導官のクリッソウラ・ディミトリアドゥさんは，雑談の時にこのような冗談をいって，日本人の指導官を笑わせた。

「政治好きのギリシャ人は朝から晩まで政治のことばかり喋り，経済のことを忘れていたので，ギリシャの経済はおくれをとった。日本経済がこんなに発展したのは，日本人が経済のことばかり考え政治の話などあまりしなかったからではないか」

「世界青年の船」は多くの成果と，そして課題をかかえて帰ってきた。これに参加した青年たちは，日とともに船がなつかしくなるようで，8月末にはイタリアに有志が集まり「同窓会」の設立について話し合った。同窓会ができ，同じプロジェクトに参加した青年たちの人のつながりが将来，非常に大きな財産になることを期待している。

（1990年8月記）

GIST OF THE ELECTIVE LECTURES

Kitabatake
Feb. 27, 28,
March 2 and 3

JAPAN AT A CRITICAL TURNING POINT

① Feb. 27 OVERVIEW—BRIEF HISTORY OF POST-WWII JAPAN

② Feb. 28 SINGLE-MINDED PURSUIT OF ECONOMIC GROWTH (VIDEO I)

③ Mar. 2 SEARCH FOR A ROLE IN THE WORLD(VIDEO II)

④ Mar. 3 DISCUSSIONS AMONG THE PARTICIPANTS

① OVERVIEW

1. Why Am I Here?
   (1) Need to Have Different Viewpoints
   (2) To Tell Foreign Friends Something About Contemporary Japan
2. A Quiz
3. Starvation, Poverty and Humiliation Right After WWII
   (1) Food Rationing
   (2) A Death of a Local Judge
   (3) Never-ending Labor Disputes and the GHQ
   (4) MacArthur and the Emperor
4. Policies of MacArthur and the GHQ
   (1) Disarmed Japan That Would Never Be a Threat to the Rest of the World
   (2) Young, Liberal Staffers Who Did in Japan What They Could Not Do in the U. S. A.

(3) The Emperor and the GHQ

5. The Korean War and Its Implications for Japan

(1) Reverse Course

(2) The Korean War and Its Economic Impact

6. A Long Way From the Rubble of the War

(1) GNP

(2) Huge Trade Surplus

7. Domestic Factors That Contributed to Japan's Economic Growth

② SINGLE-MINDED PURSUIT OF ECONOMIC GROWTH(VIDEO 1)

1. Review of Session #1

2. International Framework in Which Japan Was Put

(1) The Occupation

(2) The Cold War

(3) Gradual Acceptance in the International Community

—the End of the Occupation (1952)

—U. N. Membership (1956)

(4) The U. S.-Japan Security Treaty

(5) Lower Defense Budget

(6) The Korean War and the Vietnam War

3. Loss of Political Identity Among Japanese

(1) Sudden Sense of Loss After the War

(2) The Great Asia Co-prosperity Sphere

(3) No Other Way But to Concentrate on Economy

(4) Japanese Businessmen Everywhere

(5) "Transistor Salesmen"

4. A Political System Supporting the "Economic Track"

(1) The "1955 Political System"

(2) Gradual Decline of Opposition Parties

(3) Higher Economic Growth Policies

5. The American Market

(1) Poor and Cheap Japanese Products

(2) Americans' Attitude

(3) The First Sign of Trouble
(4) American Moves over Japanese Heads
(5) Trade Balances

6. Inflexible Domestic Political System
   (1) Special Interest Groups
   (2) Comparative Importance of Rural Voters
   (3) The Second Generation Politicians

7. Negligence in the Field of International Relations

8. Video —Other Problems Such as Women, Aging Society, etc.

③ SEARCH FOR A ROLE IN THE WORLD (VIDEO #2)

1. Review of Sessions #1 and #2

2. Western Models to Follow
   (1) The Meiji Restoration and Westernization of Japan
   (2) Policies to Make Japan Prosperous and Militarily Strong

3. No Models to Follow
   (1) Power of Money
   (2) Look-East Policy by Malaysia
   (3) NIES Countries
   (4) Direct Investments Overseas

4. Lack of Insights into International Political Situations
   (1) The Oil Shocks
   (2) Trade with South Africa
   (3) Participation in U. N. Operations

5. Gaps Between Japanese Perceptions and the World's Perceptions of Japan
   (1) Acting as a Poor Boy
   (2) Emerging New International Framework

6. Video—Interactions Between Japan and the Rest of the World

④ DISCUSSIONS

Some Suggested Topics:
—Returnee Children

—Foreign Students in Japan

—Foreign Workers

—Refugees

—Problems Arising out of Japanese Firms Overseas

—ODA

Summary

(END ITEM)